

# 七尾市 古府ヒノバンデニバン遺跡出土墨書資料概報

和田 龍介

今年度発掘調査が実施された七尾市古府ヒノバンデニバン遺跡では、4点の木簡を含む墨書資料が調査区東側の落ち込み遺構等から出土した。本遺跡は古代の能登国能登郡に属し、一帯は能登国府の推定地とされている。周辺では古府・国分遺跡や能登国分寺などが調査されている。本墨書資料は古府ヒノバンデニバン遺跡の理解のみならず、能登国府を考える上で示唆に富む内容を持つものであり、その重要性を鑑み次号に掲載予定の発掘調査略報に先立って報告するものである。遺跡の概要については次号に譲るが、8世紀前半～後半の掘立柱建物跡20棟が板塀を伴って整然と配置される官衙的色彩の濃い遺跡である。

## 1号木簡

短冊状の板材（スギ柾目材）の表裏面に墨書する。上端は欠損している。表面は丁寧にケズリ調整を施し平滑な面を整形するが、裏面は板を割り出した状態からほとんど調整が加えられていない。裏面が上の状態で出土したためか木痩せが著しく、下端に墨痕が確認できたが判読までいたらなかった。表面の一部には小刀のような刃物で文字を削り取った痕跡があり、4字の左半分が消されている。内容は3字目以降に『千字文』の第1句・2区の2字目までが記されていることから習書木簡と考えられる。木簡下端はキリオリ痕跡が認められることから、続きを裏面か別材に記されたのであろう。奈良時代では『千字文』は『論語』と並ぶ習書の初学的テキストで、平城宮跡を始め各地の官衙関連遺跡で千字文を習書した木簡が出土している。配字はバランスが悪く、特に「宇宙洪」の部分は字が極端に詰まっているため、文意から推定した。

## 3号木簡

1号木簡同様、短冊状の板材（スギ柾目材）の表裏に墨書する。4点に割れた状態で出土したが、上下左右ともほぼ完存する。表裏面にケズリ調整によって平滑面を整形するが、裏面は依存状況があまりよくない。内容は「余」「今」「人」「入」字を連続して記すもので、これも習書木簡であろう。いずれの字にも共通する「右払い」を練習したものと見え、裏面の「入」では様々な起筆からの払いを練習している。中には波磔（波勢）にも見えるように強調しているものもあり、北魏風の力強い書体である。

## 墨書土器「市殿」

須恵器無台坏の外底部に大振りな文字で「市殿」と墨書される。木簡の楷書に比べやや筆を崩した行書風の書体で、「漢字を知っている」人物による墨書であろう。墨書される無台坏は高松・押水窯跡群の田嶋編年古代Ⅲ期（8世紀第2四半期）のもので、遺跡の年代幅の中では初期に属するものである。

木簡は2点ともに習書で直接遺跡の性格を語るものではないが、『千字文』をテキストとして使用していることや、習書される板材が端材ではなく短冊状を呈することから、古府ヒノバンデニバン遺跡が少なくとも郡レベル以上の官衙関連遺跡であることを示唆している。また「市殿」墨書土器は、「殿」字が敬称でなく建物（施設）を指すとするならば市に関連する遺跡が本遺跡ないし近辺に存在する傍証となり、能登国府に付随する「国府市」の可能性を視野に入れる必要があるだろう。

1号木簡 208×24×3 011型式

- ・**〔少カ〕**
- ・**〔天地玄黄〕**
- ・**〔宇宙洪カ〕**
- ・**〔夕〕**
- ・**〔□□□〕**
- ・**〔□〕**

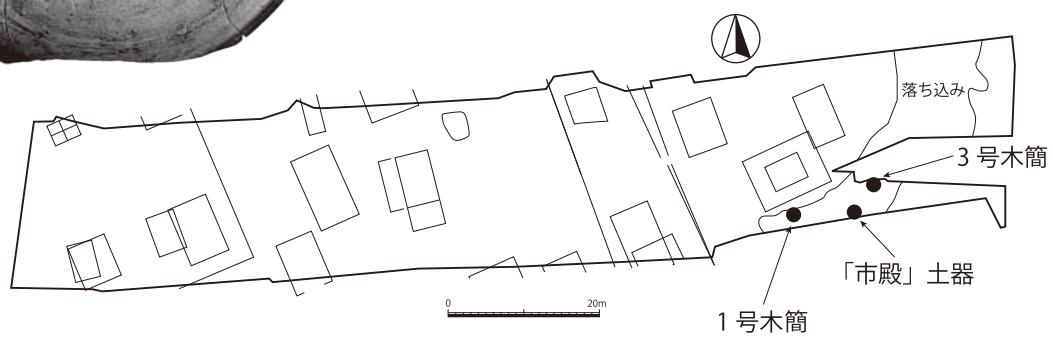


3号木簡 243×39×5 011型式

- ・「余余今今人人人人人入入」
- ・「入入入入入入入入入入」



墨書土器「市殿」



古府ヒノバンデニバン遺跡概略図 (S=1/1,000)